

近世の京都は、江戸に次いで多くの画家が集住する日本絵画の中心地のひとつである。近代になると流入する西洋絵画に対して、自らのあり方をみつめなおす機会も増し、その結果として新しい日本絵画の様式が誕生した。東京と京都では画家たちの近代化に対する考え方も実践の方法も異なり、京都の日本画家たちに対して京都画壇という呼称も行われるようになる。今日なおこの言葉は生きているが、時代の流れの中で次第にその姿は変化している。本事業では、京都画壇を画家だけがつくるものとは考えず、それを支える諸業との関わりの中に成立するものとする。絵画が制作され鑑賞される京都という場の記録として、現在の視点から京都画壇にかかわる記憶を収集し、後世に伝えることを目的とする。

今年度考えたのは、京都の画壇を支えた表具師の記憶の探索である。京都は古くから美術の中心地であり、日本の絵画をまさに裏から支える表具師の歴史もまた古い。松鶴堂や墨光堂など古美術の継承に独自の役割を果たしてきた表具師がいる一方、近代作家を表具によって支えるものもいた。春芳堂はそうした表具師を代表する店で、現在六代目伏原佳道氏がその家業を受け継いでいる。春芳堂の創業は安政3年（1856）である。京都で円山派の中島来章に画を学ぶ初代・丹波屋嘉兵衛が、師に勧められ表具の世界に転じたという。以後代々現代作家の制作を支える仕事を継承しており、中京区にある店の表に掲げられる看板は、京都画壇の重鎮竹内栖鳳が揮毫したものである。インタビューは佳道氏の父である五代佳造氏にお願いした。「決して書画より前に出てはいけない仕事」といいながら現代の京都画壇を支えてきた人物のひとりである。京都の美術家と表具師の関わりの過去と現在を記録したいと考えている。

松尾 芳樹(芸術資料館学芸員)